

## 12月25日 シンポジウム 報告書

2021/1/12

作成者	管理者
吉富	渡慶次

日時	2021年12月25日（土）14：00～16：30
場所	浦添市結の街 大研修室
会議動画	<a href="https://www.youtube.com/watch?v=jmLhmxbecAk&amp;t=172s">三線組合YouTubeにて公開 (https://www.youtube.com/watch?v=jmLhmxbecAk&amp;t=172s)</a>
参加者	別紙参照
報告書	<p><b>1, あいさつ 沖縄県三線製作事業協同組合 理事長 渡慶次道政</b></p> <p><b>2, 参加者ご紹介</b></p> <p><b>3, 文化振興会事業説明 三線組合 事務局長 仲嶺幹、吉富麻里</b></p> <p>・事業説明</p> <p>まず初めに、「おきなわの未来の三線文化」創造拠点創出事業について説明した。</p> <p>当組合では新型コロナウイルスの影響を受け、三線に携わる人々が声を上げる場所がなかった事、金銭的な支援もなかったこと、現在も生活に影響が出ている職人や実演家がいることから、業界の声を大きくするためにも連携できないかを模索して来たことを説明した。</p> <p>次に事業では、文化や音楽が多様化し県内で三線文化が衰退し、職人や実演家が専業として三線に携わることが難しくなっている現状や、経済規模の大きな県外に三線市場が移行し発展し、独自の三線文化が形成されつつあることを調査している旨、こういった現状や各々の抱える課題を共有し、業界が一丸となって解決や振興を目指さなくては、「沖縄でなくてもよい」「三線でなくてもよい」といった事態になることが懸念される旨を報告した。</p> <p>最後に、拠点づくりを業界皆で取り組みたい旨を訴えた。</p> <p>・製作者の現状</p> <p>製作者として、取り組んでいる課題として、県産三線普及、後継者不足、原材料不足を共有した。</p> <p>・音楽団体の現状</p> <p>音楽団体アンケートより、会員数の減少、若い世代への普及のさせ方の課題といった声が多く聞かれた旨を報告した。新型コロナウイルスの影響で、オンラインの活用やSNSでの情報発信の必要性などを挙げる団体もあった。</p> <p>また、言葉が難しい、県民に敬遠されがちなど普及のさせ方への課題も見受けられた。</p> <p>・若手職人・実演家の勉強会とアンケート報告</p> <p>本事業では、若手職人と実演家が勉強する機会も設けた。第1回の勉強会では流派やジャンルを超えて集まり、コロナの影響や抱える課題について話し合った。この回では特にウチナーグチ話者の減少についての危機感の声が聴かれた。50代以下の沖縄県民はほとんどウチナーグチが話せない事から、文化の衰退、三線離れが起こるのではと感じている実演家が多いようだった。</p> <p>言葉が分からなくなると、歌の魅力が理解できなくなり、自分たちを評価してくれる人も減るのではないかという危機感もアンケート回答で聞かれた。</p> <p>第2回勉強会ではくるちの杜の活動と原材料について学んだ。ボランティアで育樹・造林の継続や維持することの難しさや、くるち以外の代替材についても学ぶことで原材料の枯渇について知ってもらった。職人だけでなく使い手である演奏家、愛好者、県民を巻き込んだ育樹・造林活動が必要であることを組合から伝えた。</p> <p>第3回勉強会ではFC琉球の代表を招き、スポンサー制度や活動資金について学んだ。参加者からは、実演も大事だが、継続できる運営方法などマネージメントを学ぶ必要性を感じているなど、仕事にするためには歌を歌うだけ・三線を作るだけでは難しい面が分かってきた。</p> <p>第4回の勉強会ではくるち（黒檀）の生態についてまなび、くるちの魅力と育てる事の難しさを学んだ。三線業界では原材料は黒檀がよいという認識が根強いが、材料になるまで100年以上の年月がかかること、世界的に枯渇している事、沖縄県の気候は黒檀を育てる条件がそろっているからこそ、輸入に頼らず、県内での持続可能な育樹環境の形成が必要なことを学んだ。</p> <p>・関連団体事業紹介</p> <p>三線業界では、これまで歌三線が文化普及の中心を担ってきた。しかしながら、製作技術の継承や文化財としての研究・調査、教育など、様々な関連団体がある。こういった情報を共有するために、関連施設・団体の代表者をお招きし、事業の説明をいただいた。</p> <p>三線の歴史は長いが、歌三線の継承以外の活動は近年になってようやく取り組まれてきたことが多い。愛好者や県民にも広く三線の様々な魅力を知ってもらうためにも、こういった施設・団体とも連携したい旨を三線組合から提案した。</p>

#### 4, 議題1「三線に関する連携」について意見交換

・三線業界の連携を目指す意義

前半では、本事業で見えてきた三線業界の現状を共有し、そのうえで、連携して何をを目指すのかを説明した。前例として空手振興を上げ、連携し組織することができれば、教育の中での三線活用、若い世代への普及、海外への普及、原材料の育樹・造林、三線ツーリズムの提唱など、これまで各団体だけでは成し遂げられなかったことも実現できるのではないかと提案した。具体的には三線文化協議会のような組織をもって取り組みたいが、皆様へ意見をいただいた。

議事録

中村一雄：三線組合は三線業界の未来に危機感を持っているが、実演家はあまり危機感を持っていない。この危機感の間を埋めなければいけないと思う。

コロナの影響で東京和楽器店という三味線店が廃業になりかけた。その時、国が和三味線の棹の製作技術が無形文化財指定になる動きがある、沖縄の三線もその中に入れる可能性があることを情報共有したい。しかしながら、そのためには三線組合は製作技術を持つ職人の組合への加入率を上げていただきたい。

実演家はどうしてゆけばよいか。今年8月に県のが開いた「沖縄県文化振興審議会」が開かれた。そこから文化観光スポーツ部へ課題を投げかけている。しまことば、三線普及などが投げかけられている。しかし、この件は三線組合だけでは力が弱い。三線業界、芸能業界が一丸となる必要がある。三線文化協議会がそういった後押しにもなる。

知名定男：古典音楽には人間国宝や保持者、空手や他の伝統的工芸品にも保持者や人間国宝がいる。製作者には技術の保持者などがいない。今日は行政の方も来られているので、製作者から保持者を排出できることを目指してはどうか？県産三線のブランディングになるのではと考えます。

次に、古典音楽には保持者や人間国宝、八重山古典民謡では県の保持者がいるが、本島民謡にはいない。本島民謡からも保持者などが排出できる動きがほしい。

比嘉康春：三線組合は製作者の抱える課題の解決に向けて動いている。その課題解決に向けての連携呼びかけと認識している。しかし、製作者、実演家、業界全体の地位向上が取り組むためには連携は必要であると感じている。コロナで実演家は舞台がなくなり、収入がなくなつた。コンビニで働きながら生活をしている人もいる。こういった実演家の課題解決にも連携体は必要と考えます。

仲嶺：我々職人の課題もありますが、離島や小さな集落の伝承などにも取り組まなければいけないのではと考えています。製作者だけの課題ではなく、業界全体の課題解決を目指す連携を目指しています。

園原：三線演奏者、製作者が集まっているが、原材料が無くては三線は生まれなし使うことができない。現在三線組合でも原材料の枯渇の課題解決に取り組んでいるが、これは、沖縄で三線を使い続けることができなくなるかもしれないという、危機感から来ている。歴史的な危機といえる。三線がなければ、おもてなし文化として歴史のある歌や踊りといった文化も振興できない、沖縄の文化が断裂してしまうのではないかと心配している。

うちなんちゅの文化的DNAを継承してゆくために、ぜひ皆さんで知恵結集し取り組んでいただきたい。明治時代に三線職人が生活向上を目的とした組合のようなものを立ち上げた歴史があるようだが、120年経った現在は海外の大量生産品との競合の中での危機といったものために事業に取り組んでいるが、ウチナーンチュウが大切にしている三線を守るというのは歴史の中で取り組まれてきた。我々も将来へ残してゆくために取り組まなければと考える。協議会には「推進」「普及」などの動詞が入るほうが、目的が分かりやすい。

玉寄：組合で取り組んでほしいこととして、三線の価値向上を目指してほしい。レジェンド三線、三線にまつわる言い伝え等、集めていただきたい。

仲嶺：三線職人には、名もなき職人や名工がいる。製作者の情報もまとめたいと考えています。

大工：唄会で会うことがあっても、こうやって顔を合わせて話し合う機会はなかった。協議会が立ち上がったら、どんなことができるかと考えている。兵庫県の丹波篠山市では「でかんしょ節」で世界遺産登録を目指している。こちらでは既に日本遺産に登録されており、祭り会場が登録されている。沖縄であれば、たとえばエイサーであれば、みちじゅねーの道になりえるのでは。協議会では、ぜひ、エイサーの地方も巻き込んでどうか。沖縄民謡を世界遺産に登録することも目指したい。付加価値を高めることができれば、三線の価値も向上すると考えます。

こういったことを皆で取り組めば、実現は夢ではないと考えます。

平田：くるちの杜100年プロジェクトは実行委員会があり、実務者会議を月一回の会議を実施しています。この会議には行政、三線組合、実演家の方が参加しています。この取り組みの重要なポイントは、様々なジャンルの方がくるちの育樹について話し合っている点で、この協議会も同じようなことがいえる。本協議会は三線を核に集まると思うが、行政区分では、工芸・文化・教育、そして育樹造林であれば、森林管理課と横断する。

くるちの杜の実務者会議では読谷村より、生涯学習振興課、商工観光課、都市計画課といった様々な部署の担当者が出席しています。協議会もこういった行政区分では横断できないところも

この取り組みをもって情報共有と役割分担ができれば、意味深いプラットフォームと感じています。三線に関する拠点（館・杜・森・など）を目指してはどうか。最後に、SDGsについては県も力を入れて取り組んでいるが、三線の材料の育樹は100年以上かかる。補助金でも20～30年しかできない事業も多い。協議会をもって育樹造林事業ができるとよいと考える。

宮沢：先日大工哲弘さんからステンレス製の三線をいただいた。まさかと思ったが、いい音色がする。県外出身者として、沖縄音楽に携わってきたが、伝統と新しいものが両輪をなして回ってきているなど感じています。音楽・舞踊・組踊・エイサーなど沖縄文化はそういった側面がある。三線業界にはくるち信仰が根強いが、ステンレスとまでは言わないが、新しい材料の三線づくりに挑戦するなど、伝統を守るためにも協議会では新しいことを認める機運があり、より発展していくことを目指せばよいと考えます。

仲嶺：ご意見のある方おられなければ、（仮称）沖縄県三線文化協議会設立準備委員会の発足について目指す方向で、みなさまに拍手をいただきたいと思います。また、委員長には流派やジャンルの垣根を超え、県民を代表する立場である「沖縄県議会議長」を提案したいと思いますが、皆様よろしいでしょうか？

【会場】パチパチパチパチ

では、発足を準備する組織を作ることを目指します。本日は会場に沖縄県議会議長の赤嶺昇様にもお越しいただいておりますので、一言お願いいたします。

赤嶺：県産三線の普及をはじめ、三線の課題は沢山あると思いますが、一番大切なのはこれだけ流派がある中で、どれだけ関係団体がまとまるかがポイントだと考えています。どこに課題があるかをそれぞれが出し合っていただきたい。沖縄にとっても、また、世界の42万人の世界のウチナンチュにも三線愛好者がいますので、県内の三線文化が衰退することは失うものが大きいと感じており、沖縄県議会としても議長が準備会の委員長にということですが進めますが、私がずっと議長を続けるわけではないので、今後の継続的な活動をどうやって行くかも重要になってきます。行政・議会が連携し、皆さんが一緒になって取り組んでゆく、それぞれの役割が果たせればと思っています。

私は青年会出身で、このコロナでみちじゅねーが2年間できておらず、青年会がなくなっている現状を知りました。エイサーがなくなり、新しいメンバーが集まらず、青年会がなくなっていくことを懸念しています。

三線とエイサーも切り離せないのも、今後青年会とのかかわりも検討してゆければと思います。また、こういった集まりには、できれば教育委員会の関係者も招きたい。今日は来られてないのではないかと思います。教育も大切だと考えています。沖縄の子供がみんな演奏できるように持っていければよいのではと考えています。このように、皆さんと積極的な提案を出し合いたい。また、来年は世界のウチナンチュ大会、復帰50周年で、こういったイベントには空手が目立ちがちですが、三線も負けずに、皆さんも関わっていただければと思います。共に頑張ってください。

仲嶺：三線組合では、昨年県議会議長へ相談してきたが、行政や県議・市議なども巻き込んで行けば、地域単位でも三線振興を目指すのではと応援いただいています。

## 5、議題1「ウチナンチュ大会での三線催事」について意見交換

三線組合より、案として「三線ワールドフェスティバル」を提案し、県民・国内外の三線愛好者が楽しめる催事を、世界のウチナンチュ大会に併せて開催することを提案した。

これをもって、業界内の連携の機運醸成を目指し、若い世代の活躍の場・経験を積む場にしてはどうかと提案した。

宮城：ウチナンチュ大会実行委員会事務局長の宮城です。沖縄県は国内有数の移民県で、42万人の県系の方が世界中にいるといわれています。

海外に渡った方々は大変な苦勞をされ、現在は現地社会に溶け込み生活されています。

そして、多くの方が三線をもってわたり、苦勞する中で心の支えになっていたと聞いていま

す。現地は2、3、4世の方々に移っているが、県人会の活動では三線やエイサーを学校等で取り組むことで沖縄のアイデンティティをつなぐ取り組みをされていると聞いています。

世界の県系人を繋げ、その功績をたたえるための大会が世界のウチナーンチュ大会です。

大会は前夜祭パレードを皮切りに5日間のイベントを開催します。

国内外の県系の方へアンケートを取りますと、三線やエイサーを本場沖縄で見たい、聴きたい、体験したいという声は多く、さらに県民との交流の希望も多いです。

三線組合からの相談もいただいていたのですが、ワールド三線フェスティバルについてはぜひ世界のウチナーンチュ大会で、三線の演奏者が演奏を披露できる場として協力してゆきたいと考えています。また、県民の皆様にも三線を知っていただく機会にもしたいと思います。

仲嶺：昨年から、ウチナーンチュ大会事務局の皆さまには未確定な要素が多い中、相談に乗っていただき、ありがとうございました。

世界のウチナーンチュ大会では他では見れない企画を検討できればと考えています。

ゆくゆくは世界一決定戦なども検討したい。流派も違うので難しいかもしれませんが、若い世代の目標、スターを生み出す仕組みを、連携体で検討したい。

皆様のアドレスもよろしくお願ひ申し上げます。来年は時間がないので、スポンサー次第でイベント規模がきまる。必要であればクラウドファンディングも検討したい。

行政からは助成金の活用も検討します。来年は連携組織がこういった取り組みをすることの発信をし、次回体験に臨みたい。

神谷：琉球民謡業界では、団体の分断が進んでしまったが、私たちは連合会を組織しまとめる努力をしています。後々のビジョンは民謡会館を立ち上げたいと考えています。

ぜひ皆様のお力も借りながら頑張りたいと思います。

山下：沖縄県ものづくり振興課の山下です。この取り組みは産業の側面からみますと、三線のリブランディングにもつながるとりくみと捉えています。

また、県の施設として豊見城市に工芸の杜もできるので、ウチナーンチュ大会でも活用頂き、新しい三線の情報発信をしていただけるとよいと思います。

林：沖縄県文化振興会の林です。本事業の取り組みを担当しています。

三線組合では県の補助事業を活用し活動されていると思います。

協議会として、縦割りの行政等の横断することで、様々な助成金を活用することができると思います。また、実演家の方が自主的な活動ができるかという課題があるようだが、協議会の活動の相談窓口として三線組合が役割を果たせるのではと感じています。

米谷：沖縄観光コンベンションビューローの米谷です。私は移住して20年ですが、地元で三線とエイサーをし、移住してから三線を続けてきました。

三線ソーリズムというワードがありましたので、コンベンションビューローが呼ばれたのではないかと考えていますが、県の観光施策も量より質の提供と変化しています。

質を上げ消費単価の向上を目指すのですが、そのためには本物を見せる、ということが実証実験やモニターツアーを通じて感じています。

コロナ禍では沖縄県はアウトドア分野は伸びてきました。たとえば、三線も一あしびーのような野外での三線体験を商品にするなども検討できるのでは。また、長期滞在者への提案なども検討できるのではないのでしょうか？

町田：那覇市商工農水課の町田です。那覇市では伝統工芸館や歴史博物館で三線に関わっています。商工農水課では工芸品としての三線組合さんと関わっていますが、縦割りの行政の中で横の連携不足は感じています。協議会ができることで、我々も横の連携の強化をしてゆくべきと感じました。県とも連携して行きたい。今日は勉強になりましたので、またの機会があれば引き続き参加してゆきたいと思います。

仲嶺：それでは、協議会の準備と県議会議長を委員長に置くことを承認させていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか

参加者（パチパチパチパチ）

仲嶺：それでは、2月6日（日）に臨時総会と発足宣言式を実施します。

1月31日までに準備委員会申込と総会・発足宣言式への出席可否を事務局へご提出頂くようお願いいたします。

**6. 締め挨拶 沖縄県三線製作事業協同組合 副理事長 譜久山勝**

## 参加者アンケート回答

Q1、シンポジウムの感想をお聞かせください。

●年の瀬にも関わらず、これほど沢山の方が集まり、これからに期待できると思いました。ぜひ一緒に頑張りたいです。

●三線業界の現状等や各団体の取り組みについて知ることができてよいシンポジウムであった。

●今後は準備委員会でも連携してゆきたい。

●シンポジウムを通じて設立準備委員会立上げについて明確化されないうちに立ち上げという流れになっている。しかしながら、立上げには賛成である。

●原材料の確保について、八重山くるちのことを具体化させる話をしていくことが必要と思う。

●県内の芸能団体・芸能家が集まったことはとても画期的なことであり、三線文化の大きな推進力となる

●協議会の設立が賛同されたことがとても意義深い会合であった。

この機運をどう持続させていくが大きく問われるであろう。

●協議会設立は3年後といわず、早めに熱いうちに進めた方がよいと思います。

●約40名の関係者が一同に集うということは大変有意義である。

●シンポジウムというのではなく、意見交換会は準備委員会の結成大会といえるかもしれない。

●業界の皆さんが一つにまとまりさらに継続できるシステムが作れるよう期待しています。

●前向きな話があり、厳しい状況だと思いますが、可能性を感じました。

Q2,業界の連携について

●三線の価値向上、伝統的工芸品としての魅力向上につながるような話し合いをしたい。

Q3,ウチナーンチュ大会にむけて

●ワールド三線フェスティバル、その他催事で連携できることがあれば協力してゆきたいと思います。

●那覇市内の関連施設での連携企画もできればなど。

## 出席者一覧

沖縄県三線製作事業協同組合	理事長 渡慶次道政
沖縄県三線製作事業協同組合	副理事長 譜久山勝
沖縄県三線製作事業協同組合	副理事長 岸本尚登
琉球古典音楽野村流松村統絃会	会長 玉寄英一様
琉球古典音楽野村流音楽協会	会長 宮城勝秀様
琉球古典音楽野村流保存会	副会長 宮城赴様
琉球古典音楽野村流伝統音楽協会	会長 金城幸浩様
琉球古典音楽安富祖流絃聲会	会長 照喜名進様
琉球民謡協会	会長 宮良康正様
沖縄県民謡合同連合会	副会長 神谷幸一様
沖縄県民謡合同連合会	事務局長 城間毅様
琉球国民謡協会	理事長 金城呂介様
八重山古典音楽 安室流協和会 那覇支部	代表 大島 悟様
八重山古典民謡保存会	事務局長 東輝文様
那覇八重山古典民謡保存会	事務局長 中野宏様
八重山古典民謡伝統協会	会長 佐事安夫様
沖縄宮古民謡協会	事務局長 石原朝泰様
沖縄県立博物館・美術館	博物館班 学芸員 篠原あかね様
琉球三線楽器保存・育成会	会長 銘刈春政様
琉球三線楽器保存・育成会	事務局長 前原信喜様
沖縄美ら島財団	首里城公園管理部事業課 副参事 上江洲安亨様
沖縄県立芸術大学	准教授 新垣俊道様
国立劇場おきなわ	芸術監督 嘉数道彦様
県産三線ブランド化委員	園原 謙様
県産三線ブランド化委員	大工哲弘様
県産三線ブランド化委員	知名定男様
県産三線ブランド化委員	比嘉康春様
県産三線ブランド化委員	平田大一様
県産三線ブランド化委員	宮沢和史様
国指定重要無形文化財「琉球古典音楽」（各個認定）保持者	中村一雄様
沖縄県議会	議長 赤嶺昇様
沖縄県ものづくり振興課	工芸・ファッション産業班班長 山下ひかり様
沖縄県ウチナーンチュ大会実行委員会事務局	室長 宮城清美様
那覇市商工農水課	課長 町田務様
沖縄観光コンベンションビューロー	総務部参事 兼 総務・経理課課長 米谷 保彦様